

四川大地震・四姑娘山登山基地からの報告 II (続報 5月25日現在)

成都から四姑娘山登山基地・日隆にいたる道は、丹巴ルートに続いて夾金山ルートも通れるようになり、バスも走るようになりました。但し、バスのチケットは窓口では販売されておらず運転手から直接買います。

また、政府から食料や衣類が援助されるようになりました。また、汶川県からの電力は絶たれたままですが、5月25日現在、日隆では四姑娘山電力会社が次の3種の電気を供給していて、今は長坪村が持っていた発電設備だけが長坪村の民家にだけ送電しています。また、電話もほぼ一日中繋がるようになりました。

一方で、日隆・長坪村では70%位の民家が半壊したり壁や石垣が崩れ^{*}、現在、テントでの避難生活を続けています。震度の大きな余震が続いていますのでテントでの避難生活が長期化する可能性があります。壊れた家から持ち出した生活用品も増えてテントが手狭になりました。テントの不足が問題になってきています。

なお、余震が収束した後、壊れた家を修復するこ

とになりますが、観光客の激減により村の収入が減り、10年前の水準に戻ることが予想されます。修復資金の調達は村人にとって大きな負担であり、深刻な経済的問題になると思われます。

余震の震度はよく判りませんが、地震慣れした日本人の私でも、壁や屋根の一部が壊れた下宿先の家(1階の真ん中に有る私の部屋は大丈夫ですが)から飛び出したくなるほどの余震が数日に一度くらい有り、その他の体感余震はほぼ毎日数回有ります。

食料・水などは足りています。小学校は未だ休校しています。

日隆鎮における程度の被害は他の村にも出ていますが、特に地盤が弱い長坪村では民家の70%(昔ながらの工法で建てた石積みの民家の殆ど)が半壊したり壁や石垣が崩れるなどの大きな被害を受けました。

^{*}泥と小石で固めながら石を積む、昔ながらの建築方法の家ほとんどが半壊したり壁や石垣が崩れました。鉄筋コンクリートやコンクリートと小石で固めながら石を積んだ建築方法の家では被害はほとんどありませんでした。

震源60キロに日本人写真家 落石が車直撃、危機一髪

【成都18日共同】中国・四川大地震の震源地から西約60キロ、高山植物の名所として知られる四姑娘山近くで、震災を体験した日本人がいることが18日、分かった。写真家大川健三さん(58)で、仕事先に向かう車を落石が直撃したが、無傷だった。共同通信の電話取材に応じた。

大川さんは同山のふもと、四川省小金県日隆在住。地元の自然保護区管理局の顧問として動植物や風景を撮影し記録する仕事をしている。

12日の地震当日、山すそを車で移動中だった。「急斜面から子どもの頭ぐらいの石がごろごろと落ちてきた。揺れに気付かず、何が何だか分からなかった」

「ガッン」。落石が車に当たったが、助手席の窓と車体フレームだったので、けがはなかった。落石を避けるため車を止め、生い茂った木の中に逃げ込み、振り向くと大規模な土砂崩れでもうもうとした土煙。初めて「怖い」と感じた。現在は、震源地から西に約150キロの丹巴に避難中だ。

2008/05/18 17:57 【共同通信】



家屋からテレビ運び出し、地震報道を見る住民ら=14日、四川省小金県日隆(写真家の大川健三さん撮影・共同)

大川さん被災の記事は「共同通信」の配信で日本各地の地方紙が報じました。